

新年を前にしての申入れ書

小牧基地指令・木村政和様および隊員の皆様へ

来年2026年7月1日は、航空自衛隊創立72カ年になります。小牧基地は、イラク戦争以来、海外への空輸作戦の唯一のC-130基地として任務を引きうけてきました。一人の戦死者もださずにきたのは奇跡的な幸運だったと私たちは受け止めました。パキスタンやイラクでC-130が撃墜されたことを知る当時の輸送機パイロット出身の溝口小牧基地司令の心中を思い出す人が、今、いるでしょうか。溝口指令は、新田原基地への転任記者会見で「アメリカが勝手に始めた戦争に日本はどこまで従っていくのか。」と発言されています。それから20年、今や自衛隊は、日本政府の政策により日中関係の最前線で活動せざるを得ないところまで来てしまいました。創立以後70年、戦死者はいませんが、訓練などで2千人を超える殉職者が出ています。日本の訓練は今以上にきびしくなります。しかし、私たちは「自衛官も制服を脱げば市民であり、同じように最高法規である日本国憲法に守られている」と主張し続けます。この立場から申入れ致します。

今年、記憶に新しい事は、T4練習機が犬山入鹿池に墜落したこと。そして11月7日国会での高市首相の台湾発言でした。墜落事故は、全自衛隊の内情の見える化であり、高市発言は、日中間に後戻りできない関係を作ったことです。どれも一人ひとりの自衛隊員に直接関係する大事件といって過言ではないにもかかわらず、大きな批判が起ららず、「パイロットの自己責任だ、首相は言うべきことを言ってくれた。」と言う空気が充満している現状です。防衛省や自衛隊がこの空気に流され、破局に向かうことを見越すことは最も恐れます。

事故があった5月14日の3日前の11日日曜日、私たちは、軍事企業見学バスツアー途中でこの基地正門前におじゃましています。小牧基地内を使ったテレビドラマ「小牧基地物語」として救急部隊を主人公にしたドラマが放映されました。「小牧基地の宣伝ドラマだ。」以上の関心はありませんでした。その3日後の事故でした。事故機が89年製でフライトレコーダーが搭載されていないことがわかりました。保有197機のうち、約60機が未搭載のまま。老朽化した練習機ほど事故の確率が高いのに予算の都合で搭載していなかった。米国製の高額兵器を爆買いするのに、一人一人の搭乗員の命を大事にしていない、と言わざるを得ません。22年、空自戦闘機が小松基地からの離陸直後に墜落、二人死亡。23年熊本師団からの多用途ヘリ、宮古島沖墜落、師団長を含む10人が死亡。24年、海自の哨戒ヘリ2機が伊豆諸島沖で衝突、乗員8人死亡。そして25年、T4練習機が小牧基地離陸直後、入鹿池に墜落、2人死亡。どれも事故原因の特定に至っていません。「隊員の事故はつきもの」との考えが命令する上位の部署にあるならば事故はなくなりません。九州や南西諸島で繰り返される日米の共同訓練の作戦計画の中に「住民の犠牲者を一人も出さない」という主張は、作戦計画と実戦では、「住民の犠牲はやむなし。」と簡単に変わってしまいます。なぜなら『戦争だからやむなし。』という答え以外にありません。今の日本の全体は、「戦時の考え方をシームレスに平時にも適用する体制作り」と私たちは理解しています。平時に通用する常識は、戦時では通用しません。「一人の命よりも国家が大事。」これが高市首相の思想であり、その体制作りを促進するための確信犯的発言が11月7日の「高市発言」だと私たちは理解せざるを得ません。ではどうすればいいんだ、と基地司令や隊員の皆さんのが聞うのであれば、私たちは断固として答えます。「国と国の条約を守

れ！法律を守れ！常識をまもれ！」これにつきます。72年の北京での日中共同声明を受けて日中間で1978年8月12日に締結された日中平和友好条約第一条を読み上げ本年最後の申入れとします。

日中平和友好条約

第1条の1、両締約国は、平和共存の諸原則の基礎の上に、両国間の恒久的な平和友好関係を発展させるものとする。

2、両締約国は、相互の関係において、すべての紛争を平和的手段により解決し及び武力又は武力による威嚇に訴えないことを確認する。

新年の新国会で、高市首相に、この条約第一条を読み上げることを要求します。そして基地司令や隊員の皆様やご家族が創立72年度、市民として県民として穏やかな一年になるように動き、祈ります。

2025年12月27日

不戦へのネットワーク

名古屋市中村区那古野1の44の17 嶋田ビル203

TEL 050-3593-5130